

きなくなると思うぞ。」

与右衛門さんの話を聞いていた若者は、

若者「いいんです、人の集まる所へ行って、座っていれば、お金がもらえるし、今日一日、何とか食べられて、ぶらぶら遊べたら、こんな楽な仕事はないからな。これからも、やめられないよ。それよりも、お金はくれるんですか。それよりえないなら、早くさっきのところへ戻って、座らないと。」

そういうと若者は元の場所に戻ろうとします。

⑥ 与右衛門「まで、まで、金はやろう。しかし、私の話を聞いてからだ。よいか。」

与右衛門さんが、そういうと若者は、また石の上に座りました。

若者「金をくれるというなら、聞いてやるよ。今度は、何が聞きたいんだ。」



与右衛門さんは、若者の顔を見つめました。若者は、与右衛門さんの顔を見ず、横を向きな

から、

若者「早くしてくれよ、わしの客が行ってしまうじゃないか。」

与右衛門さんは、ゆっくりと話を始めました。

与右衛門「おまえのその立派な体は誰からもらったものだと思うか。」

若者「そりゃ、わしが苦労して物を食べてきたので、この体になったんだよ。」

若者は、大きな胸を張って答えました。与右衛門さんはそれを見て、

与右衛門「そうだな、幼い頃から苦労してきただろうからな。しかし、お前ひとりで大きくなったのではないぞ。お前が生まれてきたのは、お父さんがいて、お母さんがいて、そしてお前が生まれた。違うか、確かに生まれて間もなく、ご両親が病気で亡くなってしまわれた。お前にとっては、とても気の毒なことだと思うが、その丈夫な身体をくれたのは、紛れもなくお前の両親だぞ。それはお前にもわかるな。その親のご恩を忘れてはいないか。それに、本当に、だれの世話にもならず、大きくなつたと、思うか。」

⑦ 与右衛門さんは、一言ずつ、ゆっくりと若者に話しかけました。若者は、きよるきよると周りを見ながら話を聞いていたが、やがて与右



衛門さんの顔をみて、

若者「わしは、親から、何もしてもらっていない。わしは、

ひとりで苦労して、食べてきたんだ。だれの、世話にも、なつてない文句を言う、あんたは一体だれなんだ。わしは、初めて会った、あんたに言われることはないんだ。どうせ、わずかな金しかくれないのだから。」

若者は、与右衛門さんに、かみつくように言いました。

与右衛門「そうか、それは私が悪かった。お前がそう思うのも、無理はない。私は、西江州（にしごうしゅう）の小川村から、弁天様にお母さんとお参りに来た者でな、中江与右衛門という者だ。弁天様の前で、お前に出会ったのも何かのご縁だ。きつと、お前のお父さんや、お母さんが弁天様に頼んだのかも知れないな。『わたしの息子を、助けてください』とな。それにお前、お金や物をもらった多

くの人たちに助けられているではないか。」

そこまで言うのと、それまで、怒つたような顔をしていた若者が、下をむいて、しばらく、何も言わなくなつてしまいました。

⑧ お母さん「どうしました、どこか体が悪くなりましたか。」

与右衛門さんのお母さんが声をかけました。

若者「いえ、どこも悪くなんかありません。」

そういつて顔をあげた、若者の目から涙がぼろぼろとこぼれました。



生つて、本当ですか。中江先生といえ、わしみたいな暮らしをしてい

は聞いています。しかも、こんな姿のわしに、声をかけてくださる方とは、思つてもいなかった。

わしは、今までだから、優しくしてもらつたことがないんです。先生みたいに、こんな言葉をかけてくれた人は初めてです。」